

| | |
|-----------|---|
| 氏 名 | あらき りょう 荒木 亮 |
| 所 属 | 人文科学研究科 社会行動学専攻 |
| 学位の種 類 | 博士（社会人類学） |
| 学 位 記 番 号 | 人博 第137号 |
| 学位授与の日 | 平成31年3月25日 |
| 付課程・論文の別 | 学位規則第4条第1項該当 イスラーム復興の混成性——インドネシアの都市と村落における「流動性」と「恒常性」の位相—— |
| 論文審査委員 | 主査 教 授 小田 亮 委員 准教授 深山 直子 委員 教 授 小池 誠(桃山学院大学) |

【論文の内容の要旨】

論文の構成¹

序論 「イスラーム復興」をめぐって

第Ⅰ章 インドネシアの近代化と説教師の人気現象にみる混成性

第Ⅱ章 小巡礼（ウムラ）にみる敬虔さと威信の両義性

第Ⅲ章 ヴェール化とそのファッション性の相克

第Ⅳ章 憑依儀礼の語りにみるムスリムの信仰とイスラームの多相性

第Ⅴ章 憑依現象と除霊（ルキヤ）にみるイスラームという救い

結論 ムスリムの生活世界と混成性からみるイスラーム回帰

¹「書き下ろし」である「序論」、「第Ⅴ章」、「結論」を除く、各章の初出は以下の通り。

・第Ⅰ章：（口頭発表）「「イスラーム復興現象」再考——インドネシア・ムスリムの日常、あるいは「混成現象」という視点をてがかりに」『2015年度 日本文化人類学会次世代育成セミナー』、東京：東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所（2015年11月）。

・第Ⅱ章：（論文・査読付）「敬虔と威信をめぐって——巡礼（ウムラ）にみるインドネシアのイスラーム復興」『宗教と社会』24:81-96、「宗教と社会」学会（2018年6月）。

・第Ⅲ章：（論文・査読付）「オブジェクトとしてのジルバップ——『イスラーム復興』再考にむけた一試論」『社会人類学年報』41:71-98、弘文堂（2015年12月）。

・第Ⅳ章：（学会の Prosiding として出版された論文）Observation about Agustusan On Suburb Village: In Changing Under/Between The Dynamics of Cultural Revival and Islamization, In *Prosiding 60 Tahun Antropologi Indonesia: Refleksi Kontribusi Antropologi untuk Indonesia*, pp.186-192, Universitas Indonesia: Depok, Indonesia（2017年12月）。

本論文は、現代インドネシアの地方都市とその近郊の村落で展開するイスラームに関連する出来事を事例として取り上げる。そのうえで、社会人類学者の大塚和夫が「イスラーム主義」と区別して提示した「イスラーム復興」という概念とそこでの「混成性」という視点を、社会学者の檜村愛子が論じている現代社会（の「再帰的近代化」）における「再帰性」と「恒常性」の両立と相剋という議論を踏まえて再構築することを通じて、「イスラーム回帰」と呼ばれる現象をより豊かに把握する分析枠組みを提示するものである。

世界最大のムスリム人口を抱える国家・インドネシアでも、世界的なイスラーム回帰の影響が1980年頃以降に顕在化したことから、近年のインドネシア・イスラーム研究は「真正さ」や「原点回帰」に着目して現地社会の「さらなるイスラーム化」と「ムスリムによる信仰の純粋化」の動向を論じてきた。こうした研究は、ヴェールを着用するムスリマの増加といった日常的な出来事、選挙活動においてイスラームが掲げられるようになったという政治をめぐる現状、イスラームの名のもとに飲酒施設や売春宿への暴力が増加しているという社会的状況、さらには、スハルト体制が崩壊（1998年）したという「権力空白」期においてイスラームが台頭してきたというインドネシア社会の現実を踏まえた分析である。ただし、人々（ムスリム）が「正しい」イスラームを希求する、ということを前提にイスラーム回帰を論じた場合、インドネシアに暮らすムスリムの日常性を「教義としてのイスラーム」に還元して捉えてしまうことが危惧される。というのも、インドネシアは、イスラーム法によって国家と国民のあり方が全般的に規定されているわけではない。加えて、ポスト・スハルト期と呼ばれる今日では、都市部を中心として近代化やグローバリゼーションの進展により欧米近代的なライフ・スタイルや大衆消費文化が人々の日常にますます浸透しており、他方で、地方都市や村落社会では、ともすればイスラームの教義とは相いれない伝統文化や慣習が地方分権化の流れのなかで再興されつつある、といった状況がみられるからである。したがって、現代インドネシアのイスラームを論じるには、こうした現地社会の独自の文脈や特徴を踏まえてイスラームの位相やムスリムの信仰のあり方を明らかにするという課題がある。より具体的に言えば、イスラーム回帰に起因する社会／個人双方のレベルでのイスラーム化と近代化による価値観や生活様式の多様化、また、文化や伝統を復興する運動の活発化といった現象を同時に視野におさめるという観点が不可欠であるのだ。

こうした問題意識に立脚したうえで、本論文では、まず、第一部にて、都市部を中心に現代インドネシアでみられる大衆消費文化としての「宗教的な商品」の消費、ないしは、「イスラーム的なもの」の受容に纏わる次のような事例、すなわち、イスラームの説教師であるアア・ギムの人気現象と彼の説教を支持するムスリムの増加（第Ⅰ章）、ウムラと呼ばれるメッカへの巡礼の流行（第Ⅱ章）、ムスリマのあいだでみられるヴェールやイスラーム服の普及（第Ⅲ章）を取り上げた。その結果、第一部で扱った「宗教的な商品」には、「宗教化」と「世俗化」という異なる二つの価値——ただし、このどちらともが社会の「再帰的近代化」の進展と「文化／宗教の客体化／オブジェクト化」によって生じた

状況とも言えるのであるが——を併存・媒介する「混成性」がみられる、ということを明らかにした。すなわち、「宗教的な商品」の消費は、個々人に宗教実践の履行を促すとともに「正しい」イスラームへの志向や敬虔さの深化をもたらす「宗教化」と、個人主義や消費文化といった欧米近代的な価値観の浸透に基づく新しいライフ・スタイルへの適応（第Ⅰ章）、自己の社会的な威信や経済力を顕示したいという欲望（第Ⅱ章）、あるいは、「お洒落をしたい」という願望（第Ⅲ章）といった「世俗化」とを同時に果たすものである、と論じた。そのうえで、本論文では、「混成性」という視点を、より基底的な視野から論じるために、「再帰的近代化」における「恒常性」と「再帰性／流動性」の両立の必要性という議論に依拠し整理することで、次のような結論を導き出した。すなわち、都市を生きる人々（ムスリム）は、大衆消費文化が生み出す「流動性」を個人化された消費行為を通じて再帰的に受容／選択していくのであるが、同時に、「再帰性／流動性」の高まりによる「（存在論的）不安」から逃れるために、「正しい」イスラームに「恒常性」を求めることになる。そこで、「宗教的な商品」の消費にみられる「イスラーム復興」の「混成性」とは、「再帰性／流動性＝世俗性」を人々が求めることを可能にしつつも、「再帰化／流動化」による不安定化から逃れるための「恒常性＝宗教性」をも同時に人々に与えることで、「恒常性」と「再帰性／流動性」の両立を可能にするものである。加えて、第Ⅲ章と小結の議論では、「宗教的な商品」を消費しているわけではない人々（ムスリム）の語りの分析を通じて、「恒常性」と「再帰性／流動性」という異なる志向／指向を媒介する「イスラーム復興」の「混成性」が、必ずしも「宗教的な商品」に限定的にみられるわけではなく、人々の日常的な生活実践やそこでの思考においても見出せる、ということを示した。なお、こうした議論は、ムスリムが「正しい」イスラームを希求することを前提に「イスラーム回帰」を論じてきた従来の研究枠組みを相対化する視点を提示するものであると言える。

次に、本論文では、第二部において、都市部に比べると「宗教的な商品」の流通と消費がそれほど浸透していない都市近郊の村落社会における村人たちの次のような相反する日常生活的営みの状況、すなわち、イスラーム回帰に反するような非イスラーム的な「憑依儀礼」の活発化（第Ⅳ章）と、それに対して、人々を苦しめる「憑依現象」を「正しい」イスラームに基づいて統制や抑止するイスラーム式の除霊（ルキヤ）の実践（第Ⅴ章）との「闘ぎ合い」を事例として取り上げた。そして、村落における憑依をめぐる問題の顕在化そのものがイスラーム回帰という状況下で生じた現象であると指摘し、「イスラーム復興」の「混成性」という議論を、都市近郊に位置するムスリムの村落での事例に適用することを試みた。その結果、都市近郊の村落においても、一方では、「正しい」イスラームからすれば敵視や排除の対象となる「憑依儀礼」を「村の伝統」として客体化してそこに「恒常性」を求めると同時に、「消費文化や『正しい』イスラームに代表される都市的なライフ・スタイルや価値観」といった「再帰性／流動性」を受容する／排除しない「混成的」な空間を創出するという思考がみられた（第Ⅳ章）。また、他方では、「憑依に煩わされること」に起因する不安定な状態を「正しい」イスラームに「恒常性」を求めて安定化す

ると同時に、それでも「憑依」に悩まされながら生きているという「再帰性／流動性」を完全には排除しない／できない「混成的」な日常生活を（ある者は再帰的に、また、ある者は不可避免的に）営んでいる、ということを示した（第Ⅴ章）。そこで、村落社会でも、「イスラーム復興」の「混成性」とそれによる「恒常性」と「再帰性／流動性」の両立・併存がみられる、ということを明らかにした。

したがって、本論文では、まず、「混成性」を基盤として「恒常性」と「再帰性／流動性」が両立しているという構造は、都市民と村人との双方が生きる日常に共通して見出すことができる論じた。そのうえで、本論文では、都市と村落との対比的検討に基づき、共通する「混成性」の構造において、「恒常性」や「再帰性／流動性」とそれを個々人にもたらす「要素」には、置換や逆転がみられるということを明らかにした。すなわち、第一部で論じた都市における「宗教的な商品」の消費にみられる「混成性」において、「恒常性」を担う要素とは、「正しい」イスラームを志向する「宗教化」であり、「再帰性／流動性」を担う要素とは、大衆消費文化において個々人が意識的に求めるようになった新たな／異なる価値への指向といった「世俗化」であった（第一部：第Ⅰ章～第Ⅲ章）。しかし、第二部で論じた都市近郊の村落に生きる人々の日常では、それらの対応関係は、次のように異なっていた。まず、憑依儀礼を肯定する村人たちにみられる「混成性」においては、「村の伝統としての憑依儀礼（を行う空間）」という要素がかれらに「恒常性」をもたらすとともに、「都市的なライフ・スタイルや価値観」という要素が、かれらの「恒常性」や固有のローカル性を脅かす「再帰性／流動性」であった（第二部：第Ⅳ章）。他方で、憑依現象に悩まされる「村人たち（の日常的な生活の場）」にみられる「混成性」においては、「『正しい』イスラームの実践による敬虔な自己」という状態がかれらに「恒常性」をもたらす要素であり、「いつ憑依に悩まされるかわからない（イスラーム的に「正しくない」）自己」という状態がかれらに「再帰性／流動性」をもたらす要素となっていた（第二部：第Ⅴ章）。

以上のことから、本論文では、「『正しい』イスラーム」という要素が、「恒常性」をもたらすだけでなく、「再帰性／流動性」をもたらすものとしても現象するという（第Ⅳ章）、さらには、「憑依」の捉え方と「恒常性」の求め方をめぐる逆転が同じ村に住むムスリムの日常性において見出すことができる（第Ⅳ章と第Ⅴ章）ということを具体的に論じた。この点は、「恒常性」と「再帰性／流動性」との両立を可能にする「イスラーム復興」の「混成性」という構造が、（第一部で示したように）「宗教化／聖」と「世俗化／俗」という固定化された二つの「要素」の「混成」として限定的に用いられる枠組みではないことを論証するものである。したがって、「イスラーム復興」の「混成性」による（相克する）「恒常性」と「再帰性／流動性」との両立・併存の創出という構造は、今日を生きる人々（ムスリム）によって求められる／必要とされるものである。ただし、「混成」する「要素」同士が、ときに（相互排他的な）相克性を孕むということ、したがって、（「再帰的近代化」による）現代社会の「原理主義化」した「貧しい恒常性」と大衆消費文化における「マクドナルド化」した「貧しい再帰性／流動性」へと分裂してしま

うという危うい状況のなかで、ムスリムは日常性に根ざした「もののやりかた」を駆使することで、「宗教化」と「世俗化」、より基底的な視野からみれば、異なる「要素」に求められる「恒常性」と「再帰性／流動性」との両立を果たすという営みを実践している。そして、この原理こそが、イスラーム回帰における（「イスラーム主義」とは異なる）「イスラーム復興」の「混成性」なのである、という結論を導き出した。